

「新しいねり粉」

収穫感謝日

2022年11月20日

コリントの信徒への手紙一5：1～8

佐々木 佐余子

今朝、「新しいねり粉」と題しましたが、さて、新しいねり粉とはどのようなものなのかを学んでみたいと思います。コリントの町は海辺にありますので、いろいろな意味で自由な気風がありました。外国の船が立ち寄り、そこで乗船者は休憩します。ですから活気あふれる街でした。そのような街に建てられたコリントの教会は様々な派があり揺れていました。そこへ今度は教会員の不品行の話がパウロの耳に入ったのです。これは大変悲しいことでした。1節を読むとショッキングなことが書かれています。「現に聞くところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしているとのことです」というのです。このみだらな行いというのは口語訳や新改訳では不品行と訳されています。この訳の方が今の時代ぴったりではないでしょうか。ある人、とは、コリントの教会員なのです。ですから問題としているのです。その方のお父さんが亡くなってしまい、奥さんが残されたのです。でもその奥さんは義理の母親ではないでしょうか。多分教会に行っていない人だと思います。というのは、パウロはその奥さんを問題としていないからです。わがものとしている、とあります。別の訳では一緒に住んでいる、とありました。でも一緒に住んでいるだけでは何も問題はないのです。ところがここで騒いでいるのは、他の教会員が問題とするほどのことが行われていたのです。そこで問題が発覚して大騒ぎになったのでした。パウロは海を隔てた向こうのエフェソにいて誰かから様子を聞いていたのです。ところが、コリントの教会は、ここでコリントの、と入れましたが、コリントの町には多分幾つかのキリストの集会があったのではないかと、それでコリントのと言っているのです。2節を読みますと、「それにもかかわらず、あなたがたは高ぶっているのか」と問いただします。コリントの町全体が道徳的にたるみ切っていて、そのような中で生活していると、クリスチャンもそのような空気になれてしまい、クリスチャンとしての初めの頃の倫理的な鋭い感覚が麻痺してしまい、高ぶりの気持ちが出てきて何とも思わなくなってしまうのかもしれないのです。そのような破廉恥なことを自分たちは出来るのだとかえって、誇ってしまっているのです。

キリスト教では7つの大罪があります。「怒り」「嫉妬」「貪欲」「大食」「怠惰」「淫欲」「虚栄」です。画家にヒエロニムス・ボスという人がおり、この人が「7つの大罪」の絵を描いているのです。「怒り」の罪を犯した人間には、2匹の犬が死んだ人の骨を奪いあう様子を描き、この死んだ人は絶えず怒っていたために死んだのです。「怠惰」の罪を犯した人間には教会に行こうとして正装した女性が、眠りこける男を起こしている姿を描いています。また「淫欲」の罪を犯した人間には、二組の男女が踊りながら道化師の男のピエロと戯れる姿を描きました。そして「虚栄」の罪を犯した人間には、悪魔に与えられた鏡と向き合う女性の姿を表しました。(その鏡にはどのような顔が映っていたのでしょうか) 画家は罪を犯し

た人間をさりげなく描くことによって、かえって、見る人の想像をふくらませて、罪の深さ、怖さを伝えようとしています。パウロは厳しく断罪をくださいます。少しも容赦しないのです。ここに使徒としての威厳を感じます。2節に「むしろ悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除外すべきではなかったのですか」と言います。除外とは破門するという意味です。戒規処分にするということです。そして、そのような除名者を出すということは、5節に「このような者を、その肉が減ぼされるようにサタンに引き渡したのです」とあるように、除名者を出すということは、除名者は教会に出入りは出来なくなるのですが、たとえ、教会に行くことはなくとも、別帳会員として残し保存するのです。本来ならば、身内からそのような者を出して悲しまなければならなかったのです。ところが彼らは見過ごしにして来た。誰も注意することもなく、自由気ままに私の知らないことだと思って目をつぶってきた。つまりは、愛がないからなのです。そして教会全体が靈的に衰退していることを見て取ったのでした。

ここでパウロはパン種のたとえ話で教会員に論じています。パンを作るには小麦粉にイースト菌を入れて膨らませるのですね。6節を読むと「わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか」と言っています。7節「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい」と教えます。教会員が高ぶっているからパン種は膨らまないのでおいしいパンができない。それ故、あなた方の傲慢さや悪意の邪悪のパン種を、イースト菌を取り除きなさいと注意しました。

ユダヤ人は早春のまだ寒い頃、過越のお祭りをします。旧約聖書でモーセがエジプトに住んでいた時、エジプト人は奴隷としてユダヤ人をひどく使いました。そこで、モーセが神に示された通り、「乳と蜜の流れる地、カナン」目指して同胞と一緒にエジプトを脱出しようとした時、急いでいたので種を入れられない固い薄いパンを食べたのです。そのことを思い出して7節「キリストが、わたしたちの過ぎ越しの小羊として屠られたのです」と言っているのです。主の十字架は小羊の代わりにイエスさまが代わりに十字架につけられて人間の罪を浄めてくださいました。ですからわたしたちは、信仰的には罪赦されているのです。「だから純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか」悪意と邪悪のパン種は使わないで、と励ましているのです。

パウロは現代の私たちの教会にも勧告しています。教会の礼拝や交わりは古いパン種によって焼かれたパンではなく、汚れのない純粋な真実のパンを用いなさいと。教会を焼きたての良い匂いの漂うパンの香りで満たしたいものです。

今朝は収穫感謝日の礼拝として守っています。日本にプロテスタントの宣教が始められて166年たちました。日本の幕末期の頃、はるばる海を渡って宣教師がたは来られました。

苦勞して福音を伝えやがて、大きな実を結びました。今日守る収穫感謝日の礼拝は宣教師がたがかつて、母国アメリカで行なわれていた教会行事を日本に伝えたものです。1620年のお話になりますがイギリスの宗教的弾圧から逃れて、北米の東海岸プリマスに漂着し

た人たちは、そこでプリマス植民地を造りました。当初小さな小型船メイフラワー号にぎゅうぎゅう詰めに積まれて、とても寒い2月ごろ、航海の旅は2か月半ぐらいでしょうか、100人に満たないイギリス人が乗船し、その内多くが半死半生で海岸に着いたのです。中には病気になり死ぬ人もいました。やがて、暖かい春になると陸は花が咲き青空が見えました。やっと船から降りて家を建て、地を耕し植民地を造りました。しばらくすると先住民が来て、「おはようございます」と挨拶しました。アメリカ先住民・アメリカインディアンとも言われますが、彼らは大変親切な人たちであり、知能も高い民族だったのです。元々は、元祖はアジア人であり、モンゴルの人たちが獲物を追いながら北上しアメリカに渡った人たちとも言われています。ですから黒い髪で黄色人です。日本人によく風貌が似ているのです。彼らは大変親切で種の蒔き方、魚の取り方を教えてあげました。春に蒔いた種はすくすく育ち秋には実を付けました。そこでイギリス人たちは神に、先住民に感謝し一緒に食事をしたと言われています。そのことを記念して毎年11月に収穫感謝日の礼拝を献げているのです。その習慣を日本に伝えたのです。日本基督教団では年間の行事として祝っています。ですから日本で行なわれている収穫感謝のお祭りとは違う行事です。

20世紀に出された『沈黙の春』は有名です。レイチェル・カーソンという作家が出版しました。春になっても花は咲かず鳥も鳴かない、これは一体どうしたのか、と疑問を問いかけます。調べるといろいろな薬剤がまかれて花も咲かず鳥も鳴かない春になってしまったと嘆きます。畑に農薬、DDTを散布した結果、すっかり植物の体系が崩れてしまった。という内容です。でもそのような過酷な状況でも植物は春になると芽を出し、秋になれば枝に沢山実をつけるのです。人間は水を与えるけれど成長させてくださるのは神なのだ、とつくづくわかります。大自然は人間によって今まで大分痛めつけられてきたけれどこのように豊かな植物で私たちは養われていると思ひ感謝です。

ところで除名処分を受けたある人は、その後どうなったでしょう。パウロの厳しい勧告はその人を滅ぼすためではありません。パウロは愛の人です。その人が悔い改めて立ち返ったら、放蕩息子の父のように、その人を受け入れ自分の指輪を外して息子の指にはめてやったでしょう。

今回通して5節のところが難解でした。もう一度さらってみましょう。5節「このような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それは主の日に彼の霊が救われるためです」とパウロは言っています。パウロはそのような者をすでに裁いていると言います(3節)。パウロは使徒の権威をもって、その場に居合わせないけれど、もう既にその人を裁いたと言っているのです。裁いたというのは、サタンに引き合わせてしまったということなのです。その人は肉体のとげや試練を与えられたかもしれませんが、しかし、その人が自分の罪を認め、悔い改めるようパウロは願っているのです。パウロはあくまでその人が神を汚さないことを学び、霊が救われるように、主の裁きの日に立ち直れるようにと願っている

るのです。

私たちの教会生活も古いパン種を処分し、新しいパン種で練ってパンを焼きましょう。すると、教会は生き生きとキリストの香りで満ちるでしょう。